



終電後、

会議室で。

— 年下後輩にほどかれた夜 —

『終電後、会議室で。―年下後輩にほどかれた夜―』

## 【第1章…残業の静寂、コーヒーの苦み】

午後九時を回ったオフィスは、昼間の喧騒が嘘のように静まり返っている。

天井から降り注ぐ白い蛍光灯の光だけが、私のデスクと、数メートル先に座る彼の背中を無機質に照らしていた。

「……はあ」

小さく、自分にしか聞こえない程度の溜息について、私はこめかみを指先で押さえた。

ノートPCの画面上で明滅するカーソルが、私の思考の停止を嘲笑っているように見える。

三日後に控えた新規プロジェクトのプレゼン資料。

数字の整合性は取れているけれど、何か「決め手」が足りない。

三十四歳、中堅と呼ばれるようになって久しいけれど、責任が重くなるほど、正解が見えなくなる夜がある。

「真帆先輩、コーヒー淹れ直してきました。……あと、これ」

不意に横から差し出されたのは、湯気を立てるマグカップと、コンビニの袋。

驚いて顔を上げると、そこには後輩の朝比奈悠真が、いつもの崩れすぎない柔らかな笑みを浮かべて立っていた。

「朝比奈くん。……まだ残ってたの？」

「資料の裏取り、もう少しで終わるので。これ、糖分補給です」

彼がデスクに置いたのは、期間限定の少し高そうなチョコレートだった。

一回りも年下の彼は、入社二年目とは思えないほど仕事が丁寧で、何より気が利く。

私のチームに配属されてから一年、彼がミスをして項垂れている姿を一度も見ることがない。

「ありがとう。でも、残りは私がやるから。明日の朝も早いんだし、もう帰りなさい」

私は意識して「先輩」の顔を作り、彼を促した。

けれど、彼は自分のデスクに戻るところか、椅子を引いて私の隣に腰を下ろした。

「先輩が帰るまで、帰りません」

「……子どもみたいなこと言わないの。ほら、電車の時間もあるでしょ」

「子ども扱いしないでください。……俺、これでも男ですよ」

ふとした瞬間に、敬語の語尾が少しだけ低くなる。

いつも通りの、迷いのない真っ直ぐな瞳。

彼と目が合うと、心臓の奥がわずかに跳ねるのを感じて、私は慌てて視線を資料に戻した。

「男だなんて、分かってるわよ」

「本当ですか？ 便利な『メモ魔の後輩』くらいにしか思われてない気がしますけど」

彼は少しだけ悪戯っぽく笑いながら、私の手元にある資料を覗き込んできた。

……近い。

柔軟剤の清潔な香りと、彼自身の体温が混ざり合った匂いが、鼻腔をくすぐる。

オフィスという公の場所。

フロアには二人きり。

そんなシチュエーションが、ただの「仕事の確認」を、妙に生々しいものに変えていく。

「……朝比奈くん、距離が近い」

「資料、見えにくいですか？」

「そうじゃなくて……」

言いかけて、言葉を飲み込む。

彼は平然とした顔で、私のPC画面を指し示した。

「このグラフ、もう少しコントラスト上げた方がいいですよ。あと、三枚目の比較表、僕が手直ししておきます。先輩、その間にコーヒー飲んでください。冷めちゃいますよ」

流れるような動作で、彼は私のマウスを握った。

私の指が、彼の温かい手の甲に一瞬だけ触れる。

「あ……」と声を漏らす前に、彼は慣れた手つきで作業を始めてしまった。

私は言われるがまま、マグカップを手取る。

苦みの強いコーヒー。

けれど、喉を通るときの熱さが、凝り固まった神経を少しずつ解かしていく。

「……助かるわ」

「いつでも頼ってください。俺、先輩のためなら、いくらでも残りますから」

キーボードをたたく規則的な音の中に、その言葉が溶け込む。

『先輩のためなら』それは、優秀な後輩が上司に向ける忠誠心なのか、それとも。

「……朝比奈くんって、たまにずるいこと言うわね」

「ずるい、ですか？ 心外だな。俺、いつだって本気ですよ」

彼は手を止めず、画面を見つめたまま答える。

その横顔は、昼間の会議で見せる「可愛い後輩」のものではなく、一人の男としての、ひどく理知的な冷たさと熱を孕んでいた。



「よし、データの流し込み、終わりました。……先輩、これを大画面で見ながら、最終調整しませんか？」

「え？」

「さすがにノートPCの画面を二人で長時間見るのは目が痛いです。あっちの会議室、まだ予約空いてますよ」

彼は、壁に設置された予約システムのモニターを指差した。

そういえば、そろそろこのフロアの照明は一部が自動消灯される時間だ。

「資料を広げるなら、あっちの方がいい。……行きましょう」

彼は私の返事を待たず、自分のノートPCを閉じ、私の重いカバンをひよいと肩にかけた。

「あ、自分で持てるわよ」

「ダメです。甘えてくださいって、さっき言ったじゃないですか」

そうやって、彼は先に立って歩き出す。

私は、彼の広い背中を追いかけてながら、胸のざわつきを抑えることができなかった。

進む先は、フロアの隅にある第三会議室。

防音加工が施され、厚手のブラインドで外からの視線が完全に遮断される、密閉された空間。

私たちがそこに入った瞬間、オートロックの電子音が「カチリ」と虚しく響いた。

それが、私たちの関係を決定的に変えるカウントダウンだとも知らずに、私はただ、彼の背中を見つめていた。